

論 文 題 目

スポーツ領域における心理支援者の臨床・訓練
経験がアセスメント活動に及ぼす影響

スポーツ科学研究科 スポーツ科学専攻

学籍番号 219M03

氏 名 大庭 貴如

指導教員 菅生 貴之 教授

目次

第1章 諸言	2
第1節 はじめに	2
第2節 心理臨床家を対象としたアセスメント研究	2
第3節 スポーツ領域における心理支援者を対象としたアセスメント研究 ..	4
第4節 目的	5
第2章 方法	6
第1節 調査時期および対象者	6
第2節 材料	6
設定1. クライエントの主訴	7
設定2. 場面および面接環境	7
設定3. カウンセラーの態度・応答	7
第3節 手続き	8
第4節 分析方法	9
第5節 倫理的配慮	11
第3章 結果	11
第4章 考察	12

第 1 節 競技に関する視点	13
第 2 節 仮説生成の視点	14
第 3 節 身体化の視点	16
第 4 節 総合考察	18
第 5 節 本研究の限界と今後の展望	19
参考文献	22
謝辞	25
表	26
附属資料	33
I ; 調査実施要項	33
II ; 音声刺激材逐語録	35
III ; 相談申込書	38
IV ; 回答紙 (問 1)	39
V ; 回答紙 (問 2)	41

論文内容の要旨

論文題目：スポーツ領域における心理支援者の臨床・訓練経験がアセスメント活動に及ぼす影響

学籍番号：219M03

氏名：大庭 貴如

指導教員：菅生 貴之

アセスメントは心理臨床家の「職業的アイデンティティ」(鑑, 2010)の一つであり, 心理支援における中核的機能に位置づけられるが, スポーツ領域ではこれまで心理支援者の専門性の視点からアセスメントを検討した研究は皆無である。

スポーツ領域における心理支援者がどのような視点からアセスメントを行い, 関わりのために見立てを行うかについて明らかにすることは, スポーツ領域で活動する心理支援者の専門性の解明につながり, それらの知見が専門家教育や研鑽過程へ展開可能な具体的な手がかりとして活用されていくことが期待できる。

そこで本研究では, スポーツ領域における心理支援者の熟達度に応じたアセスメント活動の傾向を明らかにすることを目的とした。調査は, スポーツメンタルトレーニング指導士とスポーツ心理学を専攻する大学院生 30 名を対象とし, 著者により開発された臨床事例が収録された音声刺激材を用いて対象者のアセスメント時の思考データを集めた。それらのデータを, Weiner, I.B & Bornstein, R.F., (2009)によるアセスメントのカテゴリーを用いて分類し考察に用いた。

結果, 熟練者ほどクライアントの「競技」と「身体」に関する視点を持ち, 豊富な仮説生成によりクライアントを理解している様子が認められた。アスリートへの心理支援においては, 「競技」や「身体」に関わる情報はすべての問題の背景にある選手理解の根幹と思われる。スポーツ領域における心理支援者が時間をかけ多くのアスリートと向き合い, さまざまな事例に触れていく熟達化の中で, クライアントの悩みに「競技」や「身体」から関わられるようになり, 心理支援における実践的な視点としてこれら 2 つの視点が養われていく過程があることが示唆された。

今後は, クライアントの表情やしぐさといった非言語情報が反映された臨場感のある刺激材の開発など, 研究デザインのさらなる工夫が求められる。さらに, 「競技」や「身体」に検討が至るまでの熟達化の過程において, 視点の獲得に影響した個別の臨床・訓練経験を掘り下げるなど, 職業的成長のプロセスをより鮮明にしていくとともに, 専門家教育や研鑽に活用できる実践的な知見として, 本研究の成果が活用されていくことが期待される。

Impact of Assessment in clinical and Training Activities of Counselors/Consultants
in Sports

Takayuki Oba

**Impact of Assessment in clinical and Training Activities of
Counselors/Consultants
in Sports**

Takayuki Oba

Abstract

Assessment is one of the “professional identities” of psychologists (Tatara, 2010) and it is considered a core function of psychological activities. However, no studies have examined this function in the sports field to date. Clarifying the perspective of counselors/consultants in sports when assessing clients is part of the expertise of counselors/consultants working in the this field. Such findings could provide insights that can be applied to the education and training of professionals.

The purpose of this study was to clarify assessment tendencies according to proficiency level. Graduate students (N = 30) majoring in sports psychology and certified sport mental training consultants participated in the study. The thoughts of counselors/consultants during the assessment were identified using a voice stimulator containing the clinical cases developed by the author. The data was classified based on the psychological assessment stage (Weiner & Bornstein, 2009). The results indicated that the more skilled the client was, the more the counselors/consultants considered the client’s “competition in sports” and the “body.” Moreover, counselors/consultants understood the client by generating many hypotheses. Information about “competition in sport” and the “body” seems to be the basis of the athlete’s understanding of the cause of all their problems in psychological consultations by athletes. Psychological consultants in sports spend much time managing athletes and examining different cases, and they become involved in the client’s worries through “competition in sports” and the “body.” These perspectives are cultivated as practical perspectives in psychological consultations. The voice was used as a stimulus in this research. However, research designs, including stimuli with a sense of presence using non-verbal information such as the client’s facial expressions and gestures, are needed in the future.

In the future, perspectives such as “competition in sports” and the “body” should be developed by considering individual clinical and training experiences of acquiring viewpoints and clarifying professional growth. It is expected that practical knowledge that can be used for professional education and training will increase.

第 1 章 諸言

第 1 節 はじめに

アスリートは競技生活を通して様々な心理社会的ストレスに曝されている。そのため、アスリートを対象とした心理支援においては、競技力向上のための心理的スキルの指導にとどまらず、対象者を取り巻く社会環境を考慮した支援(関矢, 2016)や心身の健康、人間的成長も視野に入れた支援(土屋, 2018)が求められており、心理支援者は専門的な訓練を積み、科学的知識を身につけた実践家(Scientist-practitioner)であることが求められている(土屋, 2018)。

心理学を科学的基盤とするスポーツ領域の心理専門資格には日本スポーツ心理学会が認定するスポーツメンタルトレーニング指導士(以下, SMT 指導士と記す)がある。SMT 指導士は「競技力向上のための心理的スキルを中心にした指導や相談を行う学識と技能を有する専門家」(日本スポーツ心理学会, 2021)と定義されている。SMT 指導士の専門性は、競技場面の心理的特徴をさまざまな側面から評価するための技法とメンタルトレーニングとしての心理技法への習熟にある(中込, 2016)とされている。「対象者について理解するために、面接や心理検査を用いて評価・査定すること」が「アセスメント」と定義されていることから(今村, 2016)、ここでの「心理的特徴の評価」とは「アセスメント」と同義として言い換えられる。「アセスメント・援助・研究の3つが心理臨床家の機能でありここに職業的アイデンティティが存在する」(鑪, 2010)と言い表されるように、アセスメントは心理支援者にとって最も重要な営みの一つと考えられている。

一般臨床と同様、SMT 指導士にとっても「選手理解」は大きな課題(中込, 2016)の一つであり、スポーツ領域における心理支援活動においてもアセスメントの果たす役割は大きいものと思われる。スポーツ領域における心理支援では、アスリートがメンタルトレーニング

グや心理支援に何を求めているか、どのように競技に取り組んでいるのかなどを聴くことから始まり、アスリートの心理的課題解決に対してどのような支援が必要かなどの「見立て」(鈴木, 2016)が重要であることが指摘されている。この「見立て」は、メンタルトレーニング指導が専門家による実践かを評価するための「ものさし」の役割を担う(菅生, 2016),と考えられていることから、スポーツ領域の心理支援者にとっての専門性を示す重要な要素の一つであると考えられる。

一方で、SMT指導士の資格認定条件(日本スポーツ心理学会, 2021)として、アセスメント関連科目の履修は必須とされていない。公認心理師や臨床心理士など他の心理専門資格では、アセスメントの理論や実践だけでなく、演習科目の履修も資格取得の必須条件に含まれており、実践的な教育が課せられている。SMT指導士においては、資質・能力が高度な技能水準に達しているか判断する指標はなく(荒木, 2011),どのような観点から専門性を高めていけばいいのか明確な整理がされていないと指摘されている。スポーツ領域における心理支援者にとって、アセスメントは中核的機能であるものの、臨床的、教育的にも知見が十分に整理されているとは言い難い状況にあると言えよう。

第2節 心理臨床家を対象としたアセスメント研究

スポーツ心理学に隣接する心理臨床領域におけるアセスメント研究は、こころを扱う対人援助機能を持つ専門分野の視点として、必要な知見を提供するものと思われる。なお、本研究では心理臨床を「心理的問題の解決や克服を促す実践領域」(倉光, 2020)と定義し、心理療法、カウンセリング、心理臨床、心理支援は区別なく互換的に用いた。援助者を表すカウンセラー、セラピスト、心理臨床家、心理支援者の用語も同義であると考え、特に区別せず原著の表記に沿って用いた。

心理臨床家を対象とした研究は、①心理臨床家のあり方・心理治療に影響を及ぼす心理

臨床家側の要因，②心理臨床家の教育・訓練，③心理臨床家の発達・熟練の3つに分類される(岩井，2007)．アセスメントは主に面接場面における心理臨床家の思考内容や意思決定の資質・能力として，心理臨床家の臨床・訓練経験の違いによる「熟達化」の文脈において議論されている．

新保(2001)は，臨床心理学を専攻する大学院生を対象に，臨床事例のビデオ刺激材を用いて臨床判断能力の検討を行なった．その結果，初心者である大学院生は，臨床事例の部分的な情報にとらわれてしまうこと，多くの仮説を立てられないこと，自身の経験や文献などで得た知識を十分に活用できないことなどが示唆された．また，新保(2004)の研究では，臨床経験から，初心者群(大学院博士課程在籍中)，初任者群(就職直後から5年目まで)，中堅者Ⅰ群(就職後6年目から10年目まで)，中堅者群Ⅱ(就職後11年目から15年目まで)，熟練者群(就職後16年目以降)の4群に対象者を分類し，心理臨床家のアセスメント時における思考過程を検討した．思考を捉える指標として，「ケースの理解・見立て・仮説・気づいたこと」，「ケースへの関わりで大切にしたいこと」，「入手したい情報・明らかにしたい情報」，「問題の中核・中心的なテーマ」，「ケースの重症度の査定とその理由」，「治療期間の予測」を用いて，インタビューにより収集した言語データを分類した．その結果，熟練者ほどケースの理解が精緻化されること，アセスメント内容の言語化に優れていることが示唆された．また，河内・斉藤(2004)は，大学生，大学院生，心理臨床家の3群を対象に実験を行い，各群の対象者が提示されたクライアント情報からどのようにクライアントを理解するのかを検討した．その結果，より豊富な専門的知識を有している心理臨床家の方が，クライアントが語った情報からより多くの仮説を立て，クライアントを適切に理解していることが示唆された．また，大平(2010)は，臨床経験が9年から38年の心理臨床家12名を対象に，逐語化された事例を刺激材として，心理臨床家の事例情報の読み解き方の特徴を検討した．その結果，心理臨床家の事例の見方には，事例世界を客

観的に捉えようとする読み方と、体験的に生きようとする読み方の2つに大別されることが示唆された。熟達化による違いや、アセスメントに関わる分析はみられないが、事例理解の特徴から経験を積んだ心理臨床家に現れる傾向が示された。

スポーツ領域における支援活動においては、選手理解のための技法は、カウンセリング（面接）が主体となる（中込，2016）とされており、また、メンタルトレーニングにも広義のカウンセリングが含まれる（平木，2016）と考えられている。鈴木（2016）は、「スポーツ心理学者とアスリートとの関係が、心理臨床におけるカウンセラーとクライアントとの関係での心の動き（心理力動）と極めて類似している」としたペディパスら（Petipas et al., 1999）を引用して、これを「SMT指導士が知っておくべき要点の一つ」と指摘している。心理支援活動におけるアセスメントが、スポーツ領域における専門性の中核として位置づけられていること、さらに、心理支援者が用いるカウンセリングを含めた関わりのための方法や支援者とクライアントとの関係性の観点からも、一般の心理臨床とスポーツ領域における心理支援には多くの共通項があると思われる。つまり、スポーツ領域におけるアセスメントを検討するにあたり、先述の心理臨床領域の研究は、スポーツ領域にも応用可能な知見として活用していけるものと考えられる。

第3節 スポーツ領域における心理支援者を対象としたアセスメント研究

スポーツ心理学領域におけるアセスメントを対象とした研究は、質問紙に代表される評価ツールの開発に焦点を当てたものがほとんどであり、方法論にまで踏み込んだ研究論文は極めて少ない。東山（2017）は、UK法を用いたメンタルトレーニング指導実践からその利用法と効果を検討し、単一の心理検査について研究を行なったが、幅広いアセスメントの利用法の検討には至っていない。大場（2006）は、SMT指導士に対する活動実態調査を行ったが、アセスメントに関する項目はなく、2006年以降同様の調査は行われていない。スポ

スポーツ領域におけるアセスメントに関する検討は、学術雑誌の特集記事や関連する学術大会のシンポジウム、認定資格養成課程におけるレクチャーにおいて、心理支援者が備えるべき資質・能力の一つとして、アセスメントの方法や心理支援者の在り方が議論されるにとどまっているのが現状である。一般臨床とスポーツ臨床との共通項は先述の通りであるが、競技力向上を前提とするアスリートと、主として精神疾患を対象とする一般臨床が想定するクライアントでは、支援に際して参照される理論が異なることが想定される。そのような違いからも、スポーツ領域におけるアセスメントの特徴や専門性を明らかにしていく試みは、スポーツ領域に則したクライアント支援の知見として有益であるとともに、スポーツ心理学におけるアセスメント研究の端緒として、理論や立場に依拠しない基礎的な知見の獲得としての価値があると言えよう。

第4節 目的

ここまでみてきたように、アセスメントは心理支援者の専門性の所在であり、対人援助活動における中核的な機能と考えられる。鱸（2018）は「心理支援者としての専門性を高めることは、クライアントへの確実な専門的な援助行為や心理的な援助を保証することを意味する」としている。このことは、スポーツ領域における心理支援者も同様に受け止められなければならないだろう。しかし、これまでスポーツ領域において心理支援者の専門性の視点からアセスメントを検討した研究は皆無である。

アスリートの抱える多くの心理的課題は「競技力向上」、「人間関係」、「身体に関わるもの」として顕れる（鈴木，2014）。こうしたスポーツ領域に特徴的なクライアントの背景に対して、専門的で、科学的根拠に沿った適切な援助が行われていくためには、スポーツ領域で活動する心理支援者側の要因を客観的な視点から検討していく必要があると思われる。さらに、クライアントを前にした臨床場面において、心理支援者が具体的に何を「手がか

り」に、どのような「仮説」や「関わりのプラン」を立て、実行しているのかを実証的に明らかにすることは、心理支援者のアセスメントの専門性の一端を明らかにすることにつながり、専門家教育や研鑽過程へ展開可能な知見として、どのような要素を身につけることが事例の理解につながるかを知る具体的な手がかりとして活用されていくことが期待できる。

そこで本研究は、スポーツ臨床における心理支援者の専門性をアセスメントの視点から検討することを目的として、スポーツ領域における心理支援者が臨床場面においてどのようなアセスメントを行いながら事例を理解し、関わりのための見立てを行うかについて、心理支援者の熟達度に応じた傾向を実証的に明らかにすることとした。

第2章 方法

第1節 調査時期および対象者

調査時期は2021年8月から12月であった。調査協力者(以下、協力者と記す)はSMT指導士資格保有者25名(男性15名、女性10名)とスポーツ心理学を専攻する大学院生5名(男性3名、女性2名)であった。協力者は、臨床年数および訓練年数の程度によって、A群；初学者、B群；中堅者、C群；熟達者の3群に分けられた。平均年齢は、初学者群25.4歳(SD = 2.6)、中堅者群33.2歳(SD = 3.6)、熟練者群49.6歳(SD = 9.8)であった。各対象者の属性を表1に示す。

第2節 材料

本調査では、著者が架空の事例を作成し音声刺激材として用いた(巻末附属資料参照)。事例は台本を元にしたロールプレイにより構成され、カウンセラー役とクライアント役はスポーツ心理学を専攻する大学院生2名により演じられた。

事例の設定条件は次の通りであった。

設定 1. クライエントの主訴

クライエントの主訴や背景といった設定の趣向に偏りが生じることを防ぐため、『精神科治療を求めてくるトップアスリートの主たる背景要因』（待鳥，2009）および『トップアスリートが心理支援を求めるきっかけ』（武田，2012）に記載されたものの中から，大学部活動で一般的と考えられるテーマを採用した。

設定 2. 場面および面接環境

新保(2004)は，初回面接が今後の事例展開の象徴(小倉，1980)であり，クライエントの語りのみに焦点化しやすいという理由から初回インタビュー面接場面を採用している。本研究においても，新保による場面設定の考え方に倣い初回インタビュー面接場面を採用した。また，大学におけるスポーツカウンセリンググループの活動(中込，菅生，幾留・森，高井，2016)を参考に，クライエントはスポーツ競技に関わる主訴で学内学生相談室に来談し，カウンセラーは非常勤として学内学生相談室に勤務する SMT 指導士資格保有者という設定を採用した。

設定 3. カウンセラーの態度・応答

特定の理論や学派に依拠した「問いかけ」や「応答」が含まれないよう配慮した。具体的には，カウンセラーの関わり方・応答を体系化したマイクロカウンセリング技法(Ivey, A. E., Gluckstern, N. B & Ivey. M. B. 1997)を参考に，カウンセラーが用いる技法を必要最小限にとどめ，寄って立つ理論や学派，考え方等の違いを極力排除することを心がけた。また，傾聴技法としては受容や共感を示す応答「んー」「そうか」「なるほど」と，クライエントの語りの「繰り返し」のみを用いた。さらに，カウンセラーの質問にも理論や考え方が影響すると考えられるため，話題はクライエントから能動的に持ち出

されるようにした。事例の作成にあたっては、スポーツメンタルトレーニング上級指導士および公認心理師資格を持つ熟練者 2 名に照会し、コメントを踏まえ複数回にわたり内容を精査した。

第 3 節 手続き

協力者にはあらかじめ調査概要や実施手順等が書かれた文書(巻末附属資料参照)を個別に郵送し、調査目的や方法、データの取り扱い等についての確認およびフェイスシートへの記入を求めた。調査はオンラインによる個人面接により行なわれ、後に分析する際の資料とするためにボイスレコーダーで録音することについてあらかじめ了解を得た。

当日の具体的な調査手順は次に示す通りであった。

- ①協力者に対して、刺激として採用した音声の構成および事例の場面設定を説明したうえで、音声をカウンセラー役として聞くよう求めた。また、カウンセラーの発言に対する言語報告になることを防ぐため、実際に自身が担当される場面として聞くよう強調して求めた。音声を聴取後に、あらかじめ郵送した回答紙に記載された 2 つの問いについてそれぞれ回答すること、回答時間に制限はないこと、メモ用紙は自由に利用できるが回収されること、実際の臨床場面をより忠実に再現するため事例の再生は一度きりであることを伝えた。
- ②協力者はあらかじめ郵送された「相談申込書」(巻末附属資料参照)よりクライアント情報を確認するよう求められた。
- ③協力者は音声の再生にあたり、インタビュー面接場面におけるカウンセラーとクライアントの会話が収録された音声を聴取し、実際に自身が担当する場面として自分ならどのような情報を収集しクライアントを理解していくか、また見立てていくかを検討するよう求められた。

- ④音源は、ビデオ会議システム；zoomのチャット機能を用いて調査者から音声ファイルが共有された。音声ファイルの共有が確認された後に、音声の再生中はビデオ会議システム；zoomの調査者側の映像および音声はオフにすることを伝え、協力者による音声の再生が確認された直後に映像と音声をオフにした。
- ⑤音声を聴取後、協力者に対して「ケースの理解」と「ケースへの具体的な関わり方」について質問紙への回答を求めた。回答を終えたことを確認したうえで、「回答紙に記載した内容について補足したいこと、書きづらいなどの理由から記載できなかったこと、追加したいことがあれば教えてください」との教示のもと言語報告を求めた。調査者が理解しづらいことがあった場合にのみ、協力者に対して追加での回答を求めた。
- ⑥インタビューを終えた後に、郵送物に同封された返送用封筒に同意書、フェースシート、回答した書類を封入し、投函するよう求めた。

予備調査

調査の開始に先立ち、SMT指導士資格保有者2名を対象とした予備調査を行い、手続き上の不備がないか、調査目的に沿った回答が得られるかについて、対象者からのフィードバックをもとに確認を行なった。

第4節 分析方法

心理臨床家の思考過程を研究した先行研究の多くは（例えば、新保，2001，2004；大平，2009），研究者により設定された分類基準を用いて心理支援者のアセスメントの視点が整理されている。スポーツ領域においては資格取得条件にアセスメント科目が必須とされていないことから、心理支援者の心理学に関わる学術的背景やアセスメントに関する知識には相当のばらつきがあることが想定される。また、本稿執筆時点では、著者は臨床経験が浅

い初学者であることも考慮し、本研究では、学術的背景や理論的立場に偏らず、一般的なアセスメントの視点を提供していると考えられる Weiner, I.B & Bornstein, R.F., (2009) を採用し、分類に用いることとした。カテゴリーは4分類あり、1)主訴の確認、2)問題の背景(生物-心理-社会モデルによる理解)、3)クライアントの理解、4-1)臨床的見立て、4-2)力動的見立て；クライアントの人物像、問題を抱える経緯、関わる上での焦点、関わる中で予想される困難、であった。生物-心理-社会モデルの各領域は、金沢ら(2019)の解釈を参考に分類基準を設定した。加えて、競技種目や競技歴、競技レベル、改善したい競技上の問題は、スポーツ臨床上の特徴的な視点(鈴木, 2014)、と考えられることから、アセスメントの視点としてカテゴリーに加え、分類の対象とした。

各カテゴリーの分類基準は次に示す通りであった。

A. 主訴の確認：何が主要な問題なのか。

B. 問題の背景_①生物：医学的要因として、発達特性や身体症状、体質などがどのように症状や問題として出現しているか（出現している事実だけを捉えているものは除外し、身体症状が出現する状況や場面、身体化の視点と関連づけられたものを対象とした。）

B. 問題の背景_②心理：心理的要因として、感情、認知、信念、ストレス、パーソナリティ、対処行動、防衛反応（適応・防衛機制）、無意識などがどのように症状や問題として出現しているか。

B. 問題の背景_③社会：社会的要因として、家族、学校、その他コミュニティなどの関係性や状況、経済的状況、ソーシャルサポートなどがどのように症状や問題として出現しているか。

C. クライアントの理解：原著では、家族関係、職業、生活に変わる対人態度、幼少期の経験がここに分類されているが、本研究では、公認心理師現任者講習会テキストに記述されている分類を優先し、それ以外あてはまらないものをクライアントの理解に分

類した。(該当する報告内容：生育歴，SMTについて，怪我や腹痛等)

D. 臨床的見立て：病態水準（問題は人格的なものか，神経症的なものか），緊急性の判断

(リファーマへの言及)

E. クライエントの人物像：クライエントに対する理解，評価，印象

E. 問題を抱える経緯：どのように問題を抱えるに至ったかという仮説

E. 関わる上での焦点：関わり方（方法）全般

E. 関わる上で予想される困難：介入によるマイナスな側面，支援を続ける上で注意する

ことやリスク，支援上の課題など（面接時間の不足・クライエント情報の不足・協力

者の面接の進め方との乖離は除く）

F. 競技に関する視点：競技歴，競技種目，戦績，パフォーマンス（パフォーマンスの変

化），競技場面に関わること（競技に関するクライエントの認知や出来事を含む）

作成した分類は，研究目的との適正および恣意性の排除を目的に，公認心理師およびスポーツメンタルトレーニング上級指導士資格を有する熟練者 1 名とともに協議のうえ決定した。本調査で用いた分類を表 2 に示す。

第 5 節 倫理的配慮

本研究は，大阪体育大学大学院スポーツ科学研究科の倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号 21 - 3)。

第 3 章 結果

得られたデータから協力者のアセスメントの視点をまとめるにあたり，まず，手書き文章のデータ化および音声データの逐語化を行い，内容の本質が損なわれない程度に不要な

部分を削除し、文体を修正した。その結果、736の素データが得られた。それらのデータを予め設定したカテゴリーに分類し、協力者と該当するカテゴリーとのクロス集計表を作成のうえ、群ごとにアセスメントの視点をまとめた（表2）。素データの作成および分類作業は、著者が記述データおよび逐語録の読み込みを複数回行った上で、分類工程を繰り返し行なった。その後、熟練者1名と協議のうえ結果を精査し、最終的な分類を決定した。

素データの作成では、言語データの分割単位について著者の迷いが多かったが、本調査の目的である「大きな傾向」を明らかにすることを優先し、データ単位については厳密さは求めなかった。また、分類工程では、「プレッシャーとして捉えている」など、音声刺激材では直接的な言及がないクライアントの認知の分類について、協力者による仮説とするか、または、クライアントの認知を心理面から捉え問題の背景として理解していると判断するかが難しい選択であった。本研究では、「～ではないか」や「～と考えている可能性がある」のように、クライアントの思考を推測していることが明らかなものを「仮説」として分類した。

第4章 考察

本研究の目的は、スポーツ領域における心理支援者が臨床場面においてどのようなアセスメントを行いながら事例を理解し、関わりのための見立てを行うかについて、心理支援者の熟達度に応じた傾向を実証的に明らかにすることであった。協力者ごとに該当するカテゴリーをクロス集計し、各カテゴリーにおける各群内の該当数、各協力者の記述内容の双方から、熟達度に応じたアセスメントの傾向について考察した。本稿では、スポーツ領域における心理支援者の傾向を明らかにすることを目的とするため、スポーツ領域に特徴的な結果と思われる3点を取り上げ考察を行なった。

第1節 競技に関する視点

スポーツ領域において特徴的な視点と考えられる「競技種目」、「競技歴」、「競技レベル」、「改善したい競技上の問題」に関する回答がみられたものを「競技に関する視点」として該当するデータを抽出し、分類を行なった。「競技に関する視点」が見られたのは、A群：2名、B群：7名、C群：6名であった。初学者に比べ、中堅者や熟練者がクライアントの競技レベルやパフォーマンスに関心を示しながら、関わりのための見立てを思考している傾向が示唆された。報告例を表3に示す。

初学者は、「競技成績はどうなるの？」(A4)、「気になる点：競技レベル」(A8)という回答にとどまる一方で、中堅者と熟練者は、「競技実績・競技歴がわかればもっといけた」(B4)、「アスリートとしての特徴を知りたい」(C5)に象徴されるように、競技について聴かなければ見立ては立てられない、と思わせるほどの競技に対する高い関心が見られた。特に熟練者では、言語報告の中で「競技レベルにもよるが」という発言が随所に見られた。クライアントの競技レベルに応じて、選手理解のための視点を変えながら関わりのための見立てを柔軟に思考している傾向が示唆された。

スポーツ心理学を専門的に学ぶ初学者にあって、クライアントの競技について関心を持たない、または、持てないことについて、心理臨床家の熟達化研究では「初学者がケースの理解や見立てにおいて、臨床事例の全体像に目を向けることよりも、部分的な情報に拘泥する傾向がある」(新保, 2001)と指摘されている。このことは、エキスパートほどワーキングメモリが発達し、複数の視点を持てるようになるとする情報処理研究の視点(Wineburg, S., 1998)とも符合する。本研究では、走ることが「しんどい」と訴え来談するクライアントの事例を扱ったが、初学者ほど「しんどさの解消」に関わり方を焦点化している傾向が見られた。つまり、主訴の「しんどい」という部分への拘りが、ケース理解

や関わり方の検討にも波及した結果、「しんどさ」をなんとかしたい、という関わり方に対する部分的な思考に至ったものと考えられる。

一方で、熟練者4名にも「競技に関わる視点」が見られなかったが、初学者とは違い、選手理解や関わり方について主訴に焦点化する様子は見られなかった。「身体の不調や監督からのプレッシャーに寄り添いながら傾聴し、彼の”痛み”を理解することが最優先」(C3)、「監督とのやりとりをもう少し聴き、どのような体験を持っているのか捉えたい」(C6)という回答からは、部分への拘泥ではなく、むしろ”クライアントの世界を体験的に生きよう”とする共感的理解の中で、クライアントの主体性に沿うことを優先的に思考している様子がうかがわれた。つまり、「競技に関わる視点」まで至らない初学者とは異なり、熟練者は競技も含めた全体性の観点から選手を理解し、さまざまな関わり方を模索していると考えられる。ただし、「競技に関わる視点」についてより詳細に検討していくためには、日頃の臨床場面においてどのような手続きや支援の流れの中で競技に触れているかなど、各心理支援者の個別性にも配慮した思考内容の収集が必要であろう。とはいえ、競技場面や競技生活からアスリートを理解することは、スポーツ領域における心理支援の本質的な視点とも考えられることから、「競技に関する視点」が欠落することは、クライアントに対する専門的な援助が困難になることを意味すると言えよう。初学者であっても、スポーツ領域の対人援助の専門家としてクライアントに向き合う以上、競技からアスリートと向き合う視点を備え、共感的理解に基づく関わり方を見立てていくことが求められる。そのためには、専門家養成段階における訓練に本調査の知見が展開されていくとともに、スポーツ領域で活動する心理支援者の「競技に関わる視点」がアセスメントに果たす役割について、更なる研究の蓄積が期待される。

第2節 仮説生成の視点

刺激材として用いた架空の事例において、カウンセラー役とクライアント役の発話以外

の情報を協力者が補い、クライアントの理解や関わり方の検討に適用した回答を「仮説」として考察に用いた。ケース理解や見立てにおいて「仮説」に該当する思考がみられたのは、A群；6名，B群：8名，C群8名であった。報告例を表4に示す。数字には大きな傾向の違いは見られないものの、クライアントの置かれた状況を想像、予測しながら足りない情報を補足するという点において、中堅者・熟練者の仮説生成による検討の特徴がみられた。例えば、「家族はそんなことを考えていないと思う」(C10)、「1人親である母親や年の離れた弟の役に立ちたいと思っている」(C5)、「このまま競技を続けて良いのかなという迷いがある」(C2)、「母親が苦しんでいる中、自分だけ好きなことやっけてもいいのかと思っている」(B7)、「自分に向き合うことをじっくりやりたいと思っている」(B6)などは、クライアントや家族、または指導者の視点でクライアントの状況を補足的に捉えられている様子がうかがえる。一方で、初学者はクライアントから発話された情報内での検討にとどまり、中堅者や熟練者にみられるようなクライアントの感情や思考を補足するような回答はみられなかった。「監督の動向が気になり自分に焦点を置いていない」(A2)、「監督からの圧を感じ、それがストレスとなりしんどいと思うようになった」(A6)、「家族や自分の将来への不安が影響している可能性がある」(A7)など、対人関係や家族、将来へ不安の中でクライアントがどのような感情や考えを抱いているのか、事例としてどのような展開が考えられるかなど、クライアントの捉えている世界を捕捉的に構成するような検討に至った回答は見られなかった。

本調査で用いた刺激材は、初回インタビュー面接のうち15分のみが切り取られた構成であったことから、通常の心理面接の時間と比べ大幅に短く、クライアントの情報は不足していたと言える。ほとんどの協力者から、見立てていく上で提示された情報では検討材料が足りないことが指摘されており、協力者は情報不足の中で検討せざるを得ない状況であった。そのような中でも、中堅者・熟練者の回答からは、与えられた情報から、協力者の

予測によりクライアントの思考や感情，周囲の状況などに想像が膨らみ，多様な検討に至っていることがうかがわれた．このことは，熟練した専門家が問題解決のスキーマから，経験や勘をもとにヒューリスティックスに基づいて意思決定する能力に長けている (Berlin & Marsh, 1993) とする先行研究とも一致する．実際の面接時間はより長く，クライアントの情報を多く引き出すことができるとはいえ，1 度の面接を通してクライアントの競技場面や競技生活上の苦悩を共感的に理解していくことは困難である．熟練した心理支援者は，多くのクライアントの主訴や問題に取り組むプロセスを経験する過程の中で，さまざまなケースの問題解決のスキーマを形成し，初回面接の，しかも冒頭の数少ない情報からでさえも，柔軟な想像性を発揮し，潜在的な可能性も含めた展開を見立てていることが示唆されたと言えよう．

第 3 節 身体化の視点

中堅者群・熟練者群の回答の特徴として「身体化の視点」があげられる．クライアントの心理的な問題を「身体化」から捉えていたのは，初学者群；0 名，中堅者群；5 名，熟練者群；7 名であった．報告例を表 5 に示す．アスリートの心理相談では身体に関する言及が多く (中込, 2004), 「選手が訴える心理的な問題を自分の専門種目の動きの混乱や身体的不調で訴えること」 (中込, 2021) は「身体化」として捉えられている．アスリートは，身体が壊れるか壊れないかのギリギリのところで身体的・精神的な探求を行なっている (鈴木, 2012) ことから，そのようなアスリートに対するカウンセリングでは「彼らの” 身体” に関する語りは大切にされねばならない」 (中込, 2006) と指摘されている．以上を踏まえると，「身体化」はスポーツ臨床に特徴的な視点であると考えられる．

初学者の回答では，「プレッシャーに弱く腹痛をよく起こす」 (A2), 「お腹が痛くなる」 (A8) のように，全ての回答においてクライアントの語りそのまま受け止められおり，

身体的不調を心理的問題として理解しようとする「身体化の視点」は認められなかった。一方で、中堅者群・熟練者群では「監督や家族との関係が下半身に現れ、その感情の処理が難しくなり腹部の不調に現れている」(B2)、「現状では身体化することでご自身の課題を引き受けており、本当の意味では向き合っておられない」(C3)のように、「身体化」の視点が明確に表現され、さらには身体化の視点がクライアントの心理社会的な問題と結びつけられることで、より深い理解がされている様子がみられた。クライアントの身体に現れていることを読み、言語化するという点においては、「身体化の視点」を持つことは初学者に見られない熟練者の傾向であると思われる。

一方で、スポーツ臨床における「身体化」は、「身体化症状」など思考や感情が身体に現れるとする精神疾患の捉え方とも共通した視点であり、身体化の視点が現れるか否かは、協力者の心理臨床への理解や専門性による違いとして表出した可能性が考えられた。そこで、「身体化」の視点の有無で協力者を分類し、各協力者の寄って立つ理論を整理した(表6)。A群では「認知行動療法」、「心理検査」、「来談者中心療法」が多く、身体化の視点が半数にみられたB群でも「認知行動療法」「来談者中心療法」が共通してみられた。一方で、最も身体化の視点がみられたC群では「箱庭療法」、「芸術療法」が多く、これらはA群・B群ではみられなかったことから、理論による視点表出の一貫性は認められなかった。

本研究の結果から「身体化の視点」を持つことと心理支援者の熟達化を因果論的にまとめるのは拙速だが、スポーツ分野で臨床経験を重ね研鑽を積んだ「心理支援者の大きな傾向」として、さまざまな学術的背景があるにせよ「身体化の視点」が現れたのは示唆に富む結果であったと言えよう。アスリート自身が「身体」への「気づき」を持つことは、心理的変容やその後の主体的な取り組みを促進する要因(米丸・鈴木, 2016)と考えられていることから、心理支援の効果の側面からも、スポーツ領域における心理支援の重要なアセスメントの視点として、身体化の視点を取り入れた選手理解の在り方や方法が検討され

ていくことが求められる。

第4節 総合考察

本研究では、SMT指導士およびスポーツ心理学を専攻する大学院生を対象として、音声刺激材を用いて抽出されたアセスメント時の思考内容から、心理支援者の熟達度に応じたアセスメントの傾向が検討された。その結果、スポーツ領域における心理支援者は臨床・訓練経験を積むほど、つまり熟達化が進むほど、クライアントの競技に関わる情報に積極的な関心を示すようになり、さらに「身体」に関わるクライアントの語りを問題の背景にある重要なメッセージとして捉え、選手理解に活用する傾向が示唆された。身体を酷使し、競技成績を追求するアスリートへの心理支援においては、「競技」や「身体」に関わる情報はすべての問題の背景にある選手理解の根幹であり、スポーツ領域における心理支援の特徴的なテーマである。スポーツ領域における心理支援者が時間をかけ多くのアスリートと向き合い、さまざまな事例に触れていく熟達化の中で、クライアントの悩みに「競技」や「身体」から関わられるようになり、心理支援における実践的な視点としてこれら2つの視点が養われていく過程があるように思われる。協力者の寄って立つ理論や事例理解の報告からは、競技力向上を目指した心理支援を指向するよりも、さまざまな心理社会的ストレスに晒されているアスリートに全人的な関わりを持とうと努める心理支援者の姿があるように思われる。そうしたことから、実践機会が少ない初学者にあっては、心理療法の理論や臨床事例による学びの知識が先行し、眼前のクライアントがアスリートであることの認識が薄まったとも考えられる。熟練者が豊かな仮説生成を展開した背景にも、スポーツ領域以外の心理臨床の学びや臨床経験からさまざまな心理社会的問題に触れる中で、多様な問題解決の枠組みが形成され、クライアントの理解につながっていることが影響していると考えられる。熟練者から、「クライアントの言葉や世界を自分の中に入れて理解し、言語化されるまでには時間がかかる」と、調査時点で言語化することの困難さが語られたこ

とからは、実際には複雑な視点を持ちながらクライアントやケースを理解しようとしている様子がうかがえる。一方で、瞬発的に言語化する熟練者もみられたことは、現在の協力者が臨床上抱えている課題や、研鑽におけるテーマ、大学相談室に勤務しているなどの立場が、状況要因として回答内容や回答量に影響していることが考えられる。

第5節 本研究の限界と今後の展望

研究方法において、いくつかの課題が見られた。一つは、心理支援者の思考を刺激し、アセスメント時の検討内容を抽出するために用いた音声刺激材である。本研究で音声刺激材を採用したのは、支援者の存在を排除しクライアントが一方向的に語るビデオ刺激材や、クライアント情報や面接過程が記述された逐語録を用いた刺激など、先行研究で用いられた手法では心理支援者がクライアントを面前に会話を展開する実際の臨床場面との乖離があまりに大きく、実証性という観点が薄弱してしまうと考えられたためであった。カウンセラーとクライアントが会話し、対話が自然と展開する刺激材として音声刺激材は新たな研究法の開拓に寄与できたと考えられる。一方で、クライアントの表情やしぐさ、態度など非言語情報が刺激材に考慮されなかったことは、アセスメントにおける重要な視点が欠落した中での検討であったと言わざるを得ない。実際の臨床場面の忠実性を高めていくためには、例えば心理臨床家養成や教育場面で行われる模擬面接を参考にするなど、非言語情報も含めたカウンセラーとクライアントの表情や息づかいも感じ取られる臨場感のある刺激材を開発するなど、さらなる研究方法の工夫が求められる。

もう一つの課題は、アセスメントカテゴリーの分類基準である。クライアントの問題の背景を捉える枠組みとして生物-心理-社会モデルを用いた。生物-心理-社会モデルは精神医学モデルのパラダイムとして、臨床的・教育的に役立つ機能(Kendler, 2010)として現代医療において広く認められているが、各領域の下位項目が明確に定められているわけでは

なく、一般的で曖昧なもの(Bolton & Gillet, 2019)という指摘も存在する。つまり、本調査で行われた各領域の線引きは厳密で明瞭なものではなく、データの分類作業に際しては分析者の主観的判断が入っていると考えられる。本調査では、熟練者も入れた分類の検討を行ったことで一定の信頼性は確保されていると考えられるが、研究デザインのさらなる精査の過程において、分類基準を明確にするなどの検討が求められる。

先述の通り、心理臨床家を対象とした研究は、①心理臨床家のあり方・心理治療に影響を及ぼす心理臨床家側の要因、②心理臨床家の教育・訓練、③心理臨床家の発達・熟練の3領域に分類されている。アセスメントが心理支援者の要因に紐づけて研究されることが多いのは、理論や学派による方法の違いがあるにせよ、最後はアセスメントをする人の要因にクライアント理解のあり方が影響されることの証左であろう。対人支援はクライアントと心理支援者の関係性において成立することを踏まえると、スポーツ領域におけるアセスメント研究においても、心理支援者を対象とした研究の広がりや知見の蓄積の中で、アセスメントの検討が深められていくことが重要であると言えよう。

金沢(2019)は、「心理職にとってのアセスメントは自らの専門性や存在意義を示す大きな武器である」と述べている。公認心理師や臨床心理士は、精神疾患などを扱う病院臨床や地域医療の中で、医師をはじめとしたさまざまな専門家との多職種連携が求められている。そうした業務上の要請から、共通言語としてのアセスメントの必要性が高いものと思われる。アスリートを対象とした心理支援の現場でも幅広いスタッフによる連携が行われている。荒井(2019)は「アスリートを支援するには、専門の異なる専門家間のコミュニケーションと、シームレスで有機的な連携・協働が必要である」と述べている。アセスメントが心理支援者の中核的機能として、スポーツ領域における心理支援活動においても多領域の専門家との連携の側面から活用方法が検討されていくことが有益であると思われる。また、心理臨床家を対象とした先行研究では、アセスメントは主に面接場面を想定し

検討されているが，スポーツ領域では競技現場での観察や，選手や監督との日常的な会話など，面接以外の方法で得られた情報がアセスメントに展開される場面も多いことが考えられる．つまり，スポーツ領域でアセスメントを検討するにあたっては，面接によるアセスメントだけではなく，スポーツ領域特有の状況を考慮した検討も実証的なアセスメントの検討を深めていく上で不可欠であろう．

本研究では，スポーツ領域に特徴的と思われる視点から考察を行なったが，その他のアセスメントを構成する要素には触れられていない．その点において，本研究のデータを用いた検討可能性は多く残されていると言える．今後は，スポーツ領域における心理支援者の傾向としてみえてきた「競技」や「身体」の視点の特徴を，隣接領域との比較や心理支援者の個別性を考慮した検討を通して深め発展させていくことで，熟達化による視点形成のプロセスや要因を明らかにしていくことが望まれる．そのような研究の蓄積とともに，スポーツ領域における心理支援者の専門性向上に資する教育や訓練のあり方へと検討が広がっていくことが期待される．

参考文献

- 1) 荒井弘和 (2019) アスリートの抱える心身医学的問題とその支援. 心身医, 59:15-21.
- 2) アイビー・グラックスターン: 福原真知子訳 (1999) マイクロカウンセリング 基本的かわり技法. 丸善: 東京 (Ivey, A. E., Gluckstern, N. B & Ivey. M. B. (1997) Basic Attending Skills (3rd ed.) Amherst, MA: Microtraining Associates) .
- 3) 荒木香織 (2011) レクチャー「スポーツメンタルトレーニング指導士に不可欠な資質」. 日本スポーツメンタルトレーニング指導士会編: メンタルトレーニングジャーナル, 5: 21-22
- 4) Bolton, D. & Gillet, G. (2019). “The Biopsychosocial Model 40 Years On”, The Biopsychosocial Model of Health and Disease New Philosophical and Scientific Developments. Cham: Palgrave Pivot.
- 5) 平木貴子 (2016) メンタルトレーニングとカウンセリングの連携. 日本スポーツ心理学会編: スポーツメンタルトレーニング教本 (三訂版). 大修館書店: 東京, pp34.
- 6) 今村律子 (2016) 用語解説. 日本スポーツ心理学会編: スポーツメンタルトレーニング教本 (三訂版). 大修館書店: 東京, pp248-254.
- 7) 岩井志保 (2007) わが国における心理臨床家研究の概観. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 54: 135-142.
- 8) 金沢吉展・神村栄一・杉原保史・鉄島清毅・橋本和明・増沢高 (2019) 一般財団法人日本心理研修センター監 (2019) 公認心理師現任者講習会テキスト (改訂版). IV-心理アセスメントと支援. 金剛出版: 東京, pp172-226.
- 9) Kendler, K. S. (2010). The rise and fall of the biopsychosocial model:

reconciling art and science in psychiatry. *American Journal of Psychiatry*. 167(8), 999-1000.

- 10) 河内哲也・斉藤恵一(2004)心理臨床家における専門的知識の利用過程-施設内の心理臨床に関して-. 認知科学研究, 3: 1-9.
- 11) 倉光修(2020)臨床心理学概論. NHK出版:東京, pp1-10.
- 12) 待島浩司(2009)トップアスリートの精神医学的治療. 日本スポーツ精神医学会編:スポーツ精神医学. 診断と治療社, pp36-40.
- 13) 中込四郎(2016)アスリートとの関係づくり. 日本スポーツ心理学会編:スポーツメンタルトレーニング教本(三訂版). 大修館書店:東京, pp24-28.
- 14) 中込四郎(2021)スポーツパフォーマンス心理臨床学. 岩崎学術出版社.
- 15) 日本スポーツ心理学会資格認定委員会:スポーツメンタルトレーニング指導士-資格申請・更新の手引き-(2021年7月以降版). <http://smt.jsssp.jp/tebiki20210701.pdf>, (参照日 2022年1月9日).
- 16) 大平大貴(2010)面接事例に関する心理臨床家の思考についての探索的検討-提示された事例記録に対する言語反応の分析-. 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, 7: 9-17.
- 17) 大場ゆかり(2006)「スポーツメンタルトレーニング指導士」の活動-さらなる活動の促進と相互連携に向けて-. トレーニングジャーナル, 5: 45-47
- 18) 小川俊樹(2019)心理療法とアセスメント(1)-成人の場合. 臨床心理面接特論 I -心理支援に関する理論と実践-. 放送大学教育振興会:東京, pp71-90.
- 19) 菅生貴之(2016)3-1メンタルトレーニングの評価. 日本スポーツ心理学会編:スポーツメンタルトレーニング教本(三訂版). 大修館書店:東京, pp50-54.
- 20) 新保幸洋(2001)臨床心理学を専攻する大学院生の臨床判断能力に関する研究. 大正大

学臨床心理学紀要, 4: 2-16.

- 21) 新保幸洋 (2004) カウンセラーの心理アセスメント能力の発達過程に関する研究. 大正大学大学院研究論集 (未公刊).
- 22) 鈴木壯 (2014) スポーツと心理臨床-アスリートのこころとからだ-. 創元社.
- 23) 鈴木壯 (2016) メンタルトレーニングに活かすカウンセリング. 日本スポーツ心理学会編: スポーツメンタルトレーニング教本 (三訂版). 大修館書店: 東京, pp30-33.
- 24) 関矢寛史 (2016) メンタルトレーニングとは. 日本スポーツ心理学会編: スポーツメンタルトレーニング教本 (三訂版). 大修館書店: 東京, pp7-11.
- 25) 武田大輔 (2012) トップアスリートに対するカウンセリングアプローチ-臨床スポーツ心理学の立場から-. 心身医, 59:22-29.
- 26) 鑪幹八郎・名島潤慈編著 (2010) 心理臨床家の手引き (第3版). 誠信書房: 東京, pp. 1-17.
- 27) 土屋裕睦 (2018) わが国のスポーツ心理学の現状と課題. 心身医, 58: 159-165.
- 28) 横山喬之, 齋藤正俊, 内村直也, 石川美久, 保井智香子, 東山明子 (2019) UK法から見た全日本柔道強化選手の精神的特徴; 性別・年齢別初回検査時データの分析. 講道館柔道科学研究会紀要, 第十七輯: 57-66.
- 29) 米丸健太 (2017) 本邦におけるアスリートの心理サポートに関する実践研究の概観- “実践を通しての研究” に着目して-. スポーツ心理学研究, 44: 19-32.
- 30) 米丸健太・鈴木壯 (2013) 身体について語る意味-心理的強化を求めて来談したアスリートへの心理サポート-. スポーツ心理学研究, 40: 31-42.
- 31) Weiner, I.B. & Bornstein, R.F., (2009) Principles of psychotherapy -Promoting evidence-based psychodynamic practice (3rd ed.). 61-80.
- 32) Wineburg, S. (1998) An expertise/novice study in the interpretation of historical text. *Cognitive Science*, 22:319-346.

謝辞

本論文の作成にあたり，土屋裕睦先生(大阪体育大学)，近藤みどり先生(大阪体育大学)から助言を受けた．ここに記して謝意を表します．

表

表 1 各群別の協力者の属性

	コード番号	調査時の所属年次	年代	臨床年数	主な取得資格（括弧内は SMT 指導士を取得年）
A 群；初心者群	A1	大学院修士課程 1 年次在籍	20 代後半 ～	0 年	なし
	A2	大学院修士課程 1 年次在籍		0 年	なし
	A3	大学院修士課程 2 年次在籍		1 年	なし
	A4	大学院修士課程 2 年次在籍		1 年	なし
	A5	大学院修士課程 2 年次在籍		1 年	なし
	A6	大学院修士課程修了	30 代前半	5 年	SMT 指導士（2021）
	A7	大学院修士課程修了		5 年	SMT 指導士（2021）
	A8	大学院修士課程修了		5 年	SMT 指導士（2019）
	A9	大学院博士課程修了		6 年	SMT 指導士（2020）
	A10	大学院修士課程修了		6 年	SMT 指導士（2017）
B 群；中堅者群	B1	大学院博士課程満期退学	20 代後半 ～	7 年	SMT 指導士（2017）
	B2	大学院修士課程修了		7 年	SMT 指導士（2020）
	B3	大学院修士課程修了		9 年	SMT 指導士（2020）
	B4	大学院博士課程修了		9 年	SMT 指導士（2015）
	B5	大学院修士課程修了		10 年	SMT 指導士（2017）
	B6	大学院博士課程修了		10 年	SMT 上級指導士（2015）
	B7	大学院博士課程満期退学		11 年	SMT 指導士（2014）
	B8	大学院修士課程修了		12 年	SMT 指導士（2013）
	B9	大学院博士課程修了		12 年	SMT 指導士（2014）
	B10	大学院博士課程修了		15 年	SMT 指導士（2015）
C 群；熟練者群	C1	大学院博士課程修了	30 代後半 ～	13 年	SMT 上級指導士（2010）
	C2	大学院博士課程修了		15 年	SMT 上級指導士（2008）・臨床心理士
	C3	大学院博士課程修了		16 年	SMT 上級指導士（2010）・臨床心理士・公認心理師
	C4	大学院博士課程修了		20 年	SMT 上級指導士（2012）
	C5	大学院博士課程修了		22 年	SMT 上級指導士（2001）
	C6	大学院博士課程修了		22 年	SMT 上級指導士（2007）
	C7	大学院博士課程修了		23 年	SMT 上級指導士（2003）
	C8	大学院博士課程修了		23 年	SMT 上級指導士（2020）・臨床心理士・公認心理師
	C9	大学院博士課程修了		35 年	SMT 指導士（2013）・臨床心理士・公認心理師
	C10	大学院修士課程修了		43 年	SMT 上級指導士（2001）

表 2 カテゴリー一覧表

アセスメントの視点 Weiner, IB & Bornstein, R.F., (2009)	初学者群										中堅者群										熟練者群									
	A1	A2	A3	A4	A5	A6	A7	A8	A9	A10	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	B8	B9	B10	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	C9	C10
A 主訴の確認	1		2	1	1		2		2	1	3	1	1	1	4	1	1	3	1	1	4	1	1	2		2	2	2	1	
問題の背景 ①生物												3		1			2				2		1			1	1			
B 問題の背景 ②心理	7	6	5	4	1	4		7	4	2	1	4	4	5	1	3	3	4	3	1	4		2	1	2		2	3		
問題の背景 ③社会	3	5	6	3	1		3	2	7	2	2	4	9	7	7	8	6	2		1	4	4		7	3		8	2	7	2
C CLの理解	1		5		3	1	3	2	2	2	1	1	1	4	4		2	1		2		2	1	2		1	8	2		
D 臨床的見立て																		3									1			
力動的見立て_CLの人物像		2		4			1		2	1				8	2	2	1	1	1									1	1	
力動的見立て_問題を抱える経緯		1		3	5		4		2	2	1	2		5	5	5	1	5	2	7	4	6	1	2			4	2		
E 力動的見立て_関わる上での焦点	5	5	12	5	6	8	2	7	5	4	6	4	8	5	5	7	14	4	6	4	7	6	5	1	5	5	2	8	13	6
力動的見立て_予想される困難																	1	1			1				1		1	1	2	
- 競技に関する視点 (鈴木, 2016)									1	1		4		1	2	1	5	1		1	3	3		10			3	5	5	
- 身体化の視点												3		3	5			4		1	4	4	5		1	1	1	2		

† 協力者ごとに該当するカテゴリーをクロス集計し、各カテゴリーにおける該当数を示した。

表 3 「競技に関する視点」としてまとめた反応例

反応例	
A 群；初学者群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 競技成績はどうか？ (A4) ・ 気になる点：競技レベル (A8)
B 群；中堅者群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 具体的な結果目標に対する発言はみられなかった (B1) ・ 競技実績，競技歴がわかればもっといけた (B4) ・ 現在の競技成績 (B5) ・ 競技場面での認知パターンとその対策 (B6) ・ 今の陸上の課題は？ (B9) ・ 5000m, 10000m, 駅伝にどんな違い？やりたいのはどっち？ (C10)
C 群；熟練者群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 緊張してパフォーマンスは実際どうなったのか (C4) ・ アスリートとしての特徴を知りたい (C5) ・ 種目性についてもっと捉えたい／自己新の変化 (C7) ・ 競技での実際のパフォーマンスの変動を確認したい (C8) ・ 競技歴含めて彼がどういうアスリートで，どういう形で大学までいるのか。競技者としての世界をまず聞きたい (C9) ・ 競技をどのくらいやってきて，どういうレベルなのか (C10)

表 4 「仮説生成の視点」としてまとめた反応例

	反応例
A 群；初学者群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 監督の動向が気になり自分に焦点を置いていない (A2) ・ 本人は陸上以外のことに組みたいのではないかと。勉強やアルバイト，就活・・・(A5) ・ 母子家庭で年の離れた弟の世話もしなければならないという環境からも陸上競技とは少し距離を置きたいのではと考えられる (A5) ・ 監督からの圧を感じ，それがストレスとなりしんどいと思うようになった (A7) ・ 自分がやりたいこと (たとえば 5000m ではなく 駅伝) をさせてもらえず，絶対的な監督に従わざるをえない状況に陥ってしまい，窮屈に感じている可能性も考えられる (A7) ・ 本人は競技について楽にやりたいというが，勉強など生活全体のことを意味してそう (A10)
B 群；中堅者群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 監督や院生の顔色を伺いながら過ごしていて，自分の競技 (練習) に集中できていない (B1) ・ 家族を含めた周囲の関わりの中で，現状を変えたい，自分らしく歩んでいきたい (陸上で頑張ること，どうありたいか?) と考えられている (B3) ・ 練習がすごくきつくて，勉強やその他のことにエネルギーを割けなくなるぐらい，練習がきつくて，そのせいで勉強や将来のことへの不安を感じている (B6) ・ 自分に向き合うことをじっくりやりたいと思っている (B6) ・ 母親が苦しんでいる中，自分だけ好きなことをやってもいいのかと思っている (B7) ・ プレッシャーや窮屈さという見えない力に意識が向いている (B9) ・ 親に対する感謝 (1 人親であること) (B10)
C 群；熟練者群	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼い頃に父が亡くなっていて，弟も小さいのであれば家でも我慢する場面が多く，自分のことよりも周囲を優先してきたはず (C1) ・ このまま競技を続けていいのかなという迷いがある (C2) ・ 生育歴から，しっかりせねばと思うことが多い一方で，父親像の不在もあり，現在の監督とは父親との葛藤のようなぶつかり方をしているのではないかと思われる (C3) ・ 就職，家庭の事情などを取り上げたくなるとは思いますが，それ以上に何かあると思う (C4) ・ 1 人親である母親や年の離れた弟の役に立ちたいと思っている (C5) ・ 母子家庭であることもあって，親の期待や経済的なことを踏まえた時に就職活動を考えなきゃいけない，競技は競技でそこも頑張らなきゃいけない，学業もがんばらなきゃいけないというような，色々なことが重なり合いながら困って来室に至っている (C8) ・ 家族はそんなこと考えていないと思う (C10)

- ・1番の問題は家庭を中心とした自分の役割をはたそうという気持ちが大きすぎること (C10)

表5「身体化の視点」としてまとめた反応例

	反応例
A群；初学者群	<ul style="list-style-type: none"> ・緊張やプレッシャーで腹痛などの身体が影響 (A1) ・プレッシャーに弱く、腹痛をよく起こす (A2) ・監督からの圧などのプレッシャーで腹痛がある (A3) ・レース前は緊張で腹痛になる (A5) ・大会時には緊張からお腹が痛くなり、身体的なしんどさも感じている (A6) ・本当の自分を抑え、我慢していたものが積もり、身体的にも影響が出てしまっている (A7) ・お腹が痛くなる (A8) ・身体症状としては腹痛があり、胃潰瘍を経験 (A9) ・プレッシャーから試合ごとに腹痛 (A10)
B群；中堅者群	<ul style="list-style-type: none"> ・監督や家族の関係が下半身に現れ、その感情の処理が難しくなり腹部の不調に現れている (B2) ・お腹が痛くなるのは具体的にどういう大会で、どんな感じでお腹が痛くなったのか (B3) ・競技、試合に出ることがストレスになり身体症状も出る、その要因としては監督からの圧力 (B4) ・1人親のため、就職への期待がある。そういったストレスが身体の不調として現れている (B8) ・試合前に感じている身体症状から監督による強いプレッシャーを感じている (B10)
C群；熟練者群	<ul style="list-style-type: none"> ・レースで身体症状がでてる。自分をしっかり表現する場でうまく表現できていない。主体性の獲得や、この人自身の男性性の獲得につながるような課題として、複雑に絡み合っただけで身体症状がでてきているんじゃないか (C1) ・大学3年まで競技を続けてきたが、高校3年頃より、病気や怪我といった身体化がみられる。身体化は父が不在とのことで、常圧的な監督に対して話ができなくて現れていると考えられる (C2) ・高校生の頃より胃潰瘍になる等、プレッシャーのかかる場面で身体化しやすい傾向があったと思われる。進学にあたり、奨学金も受けていることから、プレッシャーがさらに増加したところに加えて監督からの圧力があり、腹痛の頻度が増したと思われる。現状では身体化することでご自身の課題を引き受けており、本当の意味では向き合っておられない (C3) ・腹痛や胃潰瘍など身体症状がでるタイプで、それは高校の時から続いている (C5) ・高校の時の戦績とかも聞く中でも、怪我の話だとか、身体症状について、腹痛は腹痛としてその体験はどのような体験なのかとか、痛みをどんなふうにして受け止めているかはちゃんと聞きたいと思う (C8)

表 6 協力者の寄って立つ理論

	コード番号	寄って立つ理論
A 群 ; 初心者群	A1	心理検査
	A2	動機づけ理論, 心理検査
	A3	来談者中心療法, 認知行動療法, 心理検査
	A4	来談者中心療法, 認知行動療法, 動機づけ理論, 心理検査
	A5	交流分析, 心理検査
	A6	夢分析, イメージ療法, 行動療法, 認知行動療法, 動機づけ理論, 心理検査
	A7	精神分析, イメージ療法, 来談者中心療法, 行動療法, 認知行動療法, 学習理論, 解決指向アプローチ, 動機づけ理論, 集団療法, 心理検査
	A8	来談者中心療法, 行動療法, 認知行動療法, 解決指向アプローチ
	A9	来談者中心療法, 認知行動療法
	A10	学習理論, 解決指向アプローチ, 動機づけ理論
B 群 ; 中堅者群	B1	来談者中心療法, 認知行動療法, 芸術療法, 心理検査
	B2	来談者中心療法, ユング派心理学
	B3	精神分析, 認知行動療法, 学習理論
	B4	来談者中心療法, 認知行動療法, 学習理論
	B5	認知行動療法, 学習理論, 実存主義
	B6	学習理論, 解決指向アプローチ, 動機づけ理論
	B7	来談者中心療法, 行動療法, 認知行動療法, 解決指向アプローチ, 心理検査
	B8	来談者中心療法, 行動療法, 認知行動療法, 学習理論, 解決指向アプローチ, 動機づけ理論, 集団療法
	B9	来談者中心療法, 認知行動療法, 動機づけ理論, 交流分析
	B10	認知行動療法
C 群 ; 熟練者群	C1	夢分析, 芸術療法, ユング派心理学
	C2	芸術療法
	C3	箱庭療法, 芸術療法, 集団療法
	C4	記載なし
	C5	学習理論
	C6	精神分析, 夢分析, イメージ療法, 来談者中心療法, 箱庭療法, 芸術療法, 心理検査
	C7	認知行動療法
	C8	精神分析, 夢分析, イメージ療法, 箱庭療法, 芸術療法, 心理検査

C9	来談者中心療法，認知行動療法，解決指向アプローチ，交流分析，心理検査
C10	認知行動療法，動機づけ理論，心理検査

調査実施要項

以下の実施手順に従い、調査者のガイダンスに沿って調査を進めます。

□実施手順

1. 配布資料の確認

- ・ 次の 8 点がお手元にあることをご確認ください。
A. 調査説明書 B. フェースシート C. 同意書 D. 調査実施要項（本書）
E. 回答紙（問 1） F. 回答紙（問 2） G. メモ用紙 H. 相談申込書

2. 調査への参加確認

- ・ A. 調査説明書をご確認の上、本調査に協力いただける場合は C. 同意書へご署名ください。

3. フェースシート記入の確認

- ・ B. フェースシートが未記入の場合には、お手元にご準備の上必要事項を記入してください。

4. 音声の構成

- ・ 音声には、本研究のために調査者によって作成された架空の事例が収録されています。
- ・ 音声内の会話は、予め作成された台本をもとにしたロールプレイングで構成されています。
- ・ 音声の再生時間は約 15 分です。
- ・ 事例作成にあたり、熟練の指導者（上級スポーツメンタルトレーニング指導士）複数名へ照会し、コメントを踏まえ内容を精査しています。

5. 事例の場面設定

- ・ 音声内で対応するカウンセラーは、非常勤として大学内の学生相談室に所属している設定です。
- ・ カウンセラーの心理に関わる保有資格はスポーツメンタルトレーニング指導士のみの設定です。
- ・ 所属する学生相談室では通常、初回面接を担当したカウンセラーが 2 回目以降も対応します。
- ・ 音声のみのため、クライアントの非言語情報についてはないものとしてご了承ください。

6. 調査協力者への依頼事項

- ・ 調査協力者は、カウンセラー役として事例を聞いていただきます。
- ・ 実際にご自身が担当される場面としてお聞きください。
- ・ 音声終了後、E と F の用紙に記載の各問いについて、それぞれ回答いただきます。
- ・ 回答時間に制限はありません。
- ・ G. メモ用紙はご自由に活用いただけますが、調査終了後に回収します。予めご了承ください。

（次項につづく）

- ・回答紙への記入を終えた後に、調査協力者へ改めてケースについてインタビューします。
- ・インタビューは全て録音し、逐語録を作成の上調査資料として活用します。予めご了承ください。

7. 聴取方法について

以下の注意事項をご確認の上、ご不明な点等あれば、予め調査者にお問い合わせください。

- ・実際の臨床場面をより忠実に再現するために、事例の再生は一度きりとします。
- ・音声再生中のメモは G.メモ用紙をご利用ください。

8. クライアント情報の確認

これより、H.相談申込書をお読みいただきます。読み終わったら、調査者までお声がけください。

9. 音声の再生

今から聞いていただく音声は、大学の競技者に対するメンタルトレーニングを担当することになった指導士が担当したあるケースだとします。ケースは、初回インテーク面接時の様子の一部が録音されており、録音およびスーパービジョン等検討の場における共有について、クライアントより了承いただいているという設定です。音声を聞いて、クライアントと対面するセラピストとして、自分ならこのケースでどんな情報収集をし、クライアントを理解していくか、また見立てていくかを検討してください。聞き終えたのちに、質問にご回答いただきます。不明な点があれば調査者にご質問ください。それでは、zoom のチャット機能を用いて、音源データを送ります。再生の準備ができれば、音声を再生してください。(start)

10. 回答紙への記入

- ・はじめに E.回答紙（問 1）への回答を開始してください。記入を終えたら、引き続き、F. 回答紙（問 2）を記入してください。記入を終えたら、調査者までお声がけください。

11. インタビューの実施

- ・回答紙へ記載した内容について、補足したいこと、書きづらいなどの理由から記載できなかったこと、追加したいことがあれば教えてください。

12. 返送用封筒への同封物確認

封筒へご記入いただいた書類（B,C,E,F,G）を同封してください。

以上を以て調査を終了します。ご協力ありがとうございました。

以上

附属資料

Ⅱ；音声刺激材逐語録

TH1 今日はどうなことでこられましたか？

CL1 んー、そうですねー、やっぱり今、走ることがしんどいというかー。んー、なんていえば、何を話せばいいんですかねー。

TH2 んー、しんどいなあとと思うところをもう少し詳しく教えてもらえるかな？

CL2 そうですね。しんどいのは、試合前になると緊張して、腹いたくなるし、監督からの圧も耐えれなくなってきたしー。監督、んー、(間)それがずっとストレスだし、重い、みたいな。

TH3 んー、そうかあ。んー。

CL3 辞めようとはではないけどー、ちょっと変えていかないとまずいというか、楽にやりたいというか、って思ってたー。なんていうんだろー、っていうのは申込書にも書いたんですけどー、プレッシャーで窮屈というか、息苦しいみたいな感じかなあ・・・ありますね。

TH4 なるほどー。えーっと、今はー、3年生でー、陸上部で駅伝をやっているんですねー。

CL4 はい。

TH5 普段の練習とか大会とか、最近はどうかなあ？

CL5 10月に予選会があって、本大会が11月で。で、まあ、そこに向けて練習してる感じですね。あと・・・練習は月曜以外で、朝練と、まあ平日は朝練と、授業終わりで4時30分から全体練習があって、あーでも水曜は監督がいないので、朝練と、まあ集まれる人でミーティングしたりしてて。

TH6 んーんー。ミーティングは選手だけでやってるの？

CL6 いや、監督ー、監督の指示です。

TH7 ほー、そうかあ。

CL7 たぶん実業団？実業団とかで、なんか、指導してる、みたいな。あー、水曜、あとたまに土日のどっちかいないときもありますね。なんか大会があるとその委員？かなんか運営に入ってるみたいですね。シーズンになると、監督、あと、院生とかでスタッフの人とかもたまに、いないです。

TH8 そうかそうか。監督さんとはどうですかあ？何か気になるころはある？

CL8 んー、そうですね。圧が強いです。

TH9 その一圧ってどういう感じなんだろう？

CL9 なんていえばいいんですかねー、わかりやすくプレッシャーかけてきてー、で、本人何とも思っていない、みたいな。なんかもう、で、院生とかは気にかけてくれて「気にすんなよ」とか、声かけてくれるんですけど、まあでも、いや、ありがたいんですけど、んー、みんなプレッシャーっていうか、どんどんしんどくなってくる、っていう感じですかねー。(間)

TH10 なるほどー。

CL10 結局、練習とか、練習とか大会の前になると追い込まれるし、いやもっと、なんか、今ってそういう詰め込みでやる感じじゃないじゃないですか、もっと調整しながら、体調とか、体調管理とか、そういうのも気にしながらだし。(間)そういうのがあって当たり前みたいな、監督だからみたいなのがどうしても納得できないっていうか。(間)

TH11 そうなんだねー、納得できないねー。なるほどねー。

CL11 高校までは5,000とか10,000やってー、駅伝は大学からなんですけど、もともと駅伝って

うか、5000 で大学でもやっていきたいって思ってたんですけどー、監督に「おまえは駅伝で力つけたほうがいい」って声かけられて駅伝はじめてー。

TH12 んー、そうなんだねー。んー。

CL12 うち駅伝全国でられるので、なんか、そういう選手の体調管理、みたいな、そういうのが進んでるイメージがあって、結局、古いというかー。結局、監督が言ってることが全て、みたいな、院生とか周りのメンバーもそれでいいみたいな。しかたない・・・みたいな感じですねー。

TH13 んー、なるほどー。それが、Aさんからすると、ちょっと想像と違うと。

CL13 そうですねー。

TH14 そういうのが気になり出したのはいつ頃からなのかな？覚えてる範囲で、わかるかなあ？

CL14 1年の夏合宿が終わって、10月の予選会の前くらいからですかね。(間)

TH15 (間) そのあたりは、Aさんにとってどんな時期だったんでしょう？

CL15 んー、どうなんだろうなあ。ちょっとわからないんですけど。なんか、勉強とか、就職のこと考えると、このままでいいのかあって思いはじめたのがそれくらいかもしれないです。

(2-3 秒間)

CL16 大学も奨学金もらってるし、部活が忙しくてあんま勉強できてないし、就職とかどうしよう、みたいな。うち1人親で親父がいないんで。

TH16 お父さんいらっしやらないんだね。今1人暮らし？

CL17 いえ、実家です。

TH17 そうですかー。んー。(間)

CL18 (間) 1人親だから、お母さんがずっと働いてて、弟も年離れてて、最近まで小さかったんで、だから弟の面倒とか、まあ、お金がないし、大学行かせてもらってるし

TH18 そうかあ。お母さんもねー。

CL19 なんか、やっぱ帰ってくるのとか遅かったし・・・しっかりお金稼げる仕事につかなきゃな、みたいな、なんか、期待はしてるかわからないんですけど、そう考えると今のままでいいのかあと思うし。

CL20 陸上で頑張りたいんですけど。プレッシャーに弱くて、なんか、監督の考え方も合うかわからないし。一応こうみえて、メンタルトレーニングとかやってたんですよ(やや笑)

TH19 おー、そうかあ、メンタルトレーニングやったんだね。で、どうでした？

CL21 呼吸法とかもやってみたことはあるんですけど。

TH20 んー。

CL22 結局あんま効果がなくて、やらなくなりましたね。

TH21 そうかあー、いつからやってたの？

CL23 でも結構前ですよ。まあ、高校のインターハイ前で、腹痛くなって、一回胃潰瘍で入院してた時期で、なんとかしようと思って。一応練習ノートとかつけてたんですけど、朝と練習の後に呼吸法やった後の身体の調子を書いてました。

TH22 おー、んー、そのー、腹痛くなるっていうのは、胃潰瘍になってるくらいだから、そういうのは昔から？

CL24 そうですねー。まあでも、小学生のときはそんなに記憶はないんですけど、高校から毎回です。

TH23 そうかあ。胃潰瘍をしたのは高校のいつ？

CL25 高3ですね。

TH24 大学に入ってから？

CL26 毎回腹痛になってるんで、知らない間に胃潰瘍かもしれないです。わからないんですけど。大学に入ってから怪我もしててー、それもあるのかもしれないですけどね。

- TH25 ほーっ， そうかあ， 怪我してるんだ。いつ？
- CL27 2年になったすぐです。結構最近です。
- TH26 それは， ちなみに， どこをどんなふうに？
- CL28 右のふらはぎの肉離れで， 練習中にぶちってなって。全治2ヶ月かかりました。
- TH27 んー， そうかあ。もちろん練習もできなくなってねー。
- CL29 一応， 2週間くらいでギリ歩けるくらいにはなったんですけど， そこから時間かかりましたね。
- TH28 そうかあ。まあでも2週間でよく歩き始められるようになったねー。
- CL30 なんか， 本当その間は何もせず， 死んだように寝て， 食べての繰り返しで， 何もしてなかったんで， それで早く治ったのかもしれないですけど。そしたら痛いんですけど， ちょっと足つけれるくらいにはなったんで， あとはリハビリですね。(間)リハビリがむっちゃしんどかったんですけどー， ただ自分で自分に集中できるっていうか， 足全然動けないんですけど， ちょっとずつ動けてるっていうか， そういう意味では練習とか大会でてるより楽・・・っていうか， 楽ではなないんですけど， なんか， よかったなあ， みたいなところはありますね。
- TH30 へー， なるほどねー。そうかあー。

以上

附属資料
Ⅲ；相談申込書

2021年 7 月 28 日受付

相談申込書

あなたの相談内容については、すべての秘密を守りますので、あるがままに記入してください。

学部 体育学部 学籍番号 2191500 学年 3 クラス C
 氏名 (男・女) 担当教員 先生

生年月日 2000 年 4 月 24 日生 21 歳 所属クラブ 陸上競技部

現住所 (〒 -)

電話番号 - - 携帯・自宅・呼び出し (方)

相談したいこと (相談したいことについて、いくつでも○をつけてください。)

- ①学業のこと 2.実習のこと 3.単位取得のこと ④クラブのこと
 5.ボランティアのこと ⑥就職のこと 7.対人関係のこと 8.友人のこと
 9.家族のこと 10.男女交際のこと 11.性格のこと ⑫身体のこと
 13.寮や下宿生活のこと 14.学内でのトラブル 15.経済的なこと 16.法律のこと
 17.政治のこと 18.誰かと話したい 19.学外トラブル (訪問販売、アルバイト、交通事故)
 20.その他 ()

相談は急いでいますか? (どれかひとつに○をしてください。)

- 1.すごく急いでいる ②早いほうがいい 3.それほど急いでいない

連絡方法 (こちらから連絡しますので、以下のひとつを選び○をつけ、電話番号もしくは、アドレスをカッコ内に記入してください。)

- 1.電話 (○)
 2.Eメール ()

都合のいい時間帯 (○曜日の○時限目というように、具体的に複数記入してください。)

月曜日の2,3時限目, 木曜日の3時限目

その他、伝えたいことがあれば自由に記入してください。

特にお礼人

回 答 紙 (問 1)

- ◆問. 事例をどのように理解されましたか？そのように考えられた手がかりや根拠も教えてください。(主訴, ケース全体の理解, 仮説, その他気づいた点等)

回 答 紙 (問 2)

- ◆問. 問 1 を踏まえ、本ケースにおける具体的な関わり方 (介入方針 / 方法等) および先生が大切にされたいことを教えてください。その理由もご回答ください。(どのような些細なことでも結構です。)

